

キリスト道講演会

「神の思い」と「人の思い」(一)

——真に豊かな人生の道——

2009年11月15日(東京法曹会館)

天国の前味 イエスという蹟き 愛の思い 己を愛するごとく、心の中の闇 魂の糧 霊の貧しい人 神の思いと人の思い 天からの派遣社員 光と闇 見えない世界の太陽 心の中の大掃除 私もいつしよだよ へりくだる霊に宿る神 悲しみに代えて喜びの油を キリスト受難の秘儀 我々を救いあげるために 人間の本質的な姿 天への道を開いてくれた方 日本は最後の終着点 旧約における福音 幸いなるかな キリストの十字架 サンダーシング 山上の大告白 私はナッシングだ お前は十字架にかかって人の罪を背負え 幸いだ、私があなを慰めるから 鍵は一つ 自分で味わってください 祈り

天国の前味

皆さま、よくおいでくださいました。日曜日といいますが、皆さまにはいろんな計画、あるいは催しその他がありますので、なかなかこういう会に出てくるのは大変だろうと思いますけれども、よくおいでくださいました。残念ながらもまだ随分空席があって、もったいないという思いがいたし

ますけれども、その分皆さまは人の分も何倍も今日は貯えをためて、また一年間がんばって欲しいと思います。

毎年、私は新宿集会という小さな集まり八月一回参りまして、そこでお話をしております。昨年まで二年間はヒルティを一緒に読んできました。今年の二月からヨハネ福音書を2章ずつ読んでおります。そんなことで、今ここにいらつしやる皆さまも一年とはいわずにそういう集いにもまた来てくださいます。だんだんそういう世界に溶け込んでくだされば、うれしいなと思っっているんです。皆さま、これからとつぷりと天国に浸りきって欲しいんですよ。わずか二時間ほどしかありませんけれども、この世の中の時間からちよつと切り離されて——これは別室です、天国行き宇宙船だと思っただいて——天国の前味を二時間の間に味わっていただきたいと思うんです。

人間というのはいろんな事を成し遂げてきました。けれども、一番遅れているのは天国を知らないということなんです。

「いや、死んでから行くんでしょ。でも、逝った人は帰ってきてくれないからね」
なんて。だから、この地上にいながら、天国とはどんなところだろうか。

皆さん、この世の地上の生活が終れば、それで本当に終りと思っつらつしやいますか。本当に終りと思っつらつている人は、ちよつとおかしいと思っつらつます。必ず向こうへ行くんですね。向こうの世界がある。それは次元が違っつらつます、この肉体の次元とそういう霊の次元とは。3次元と4次元の違いです。だから、なかなか大変なんです。

なかには臨死体験などで向こうへ行つてまた戻ってくる人のお話があります。ほとんどが一致している。みんな、

「向こうは素晴らしい。戻りたくない」と言うんですよ。

「でも、あなたは地上で使命があるから、戻りなさい」

と言われて無理に戻らされる。お会いしているのは誰かというと、キリストなんです。光輝くキリスト、愛に満ち溢れたキリスト。もうそのお方に吸い込まれて、とろけそうになって抱かれて、

「もう帰りたいくない」

とみんな駄々をこねて、いやいや帰ってきている。そういう世界があるんです。そういう世界を、肉体を持ったまま現れてきて、一生懸命で話してくださいましたのがイエス・キリストという方なんですよ。

イエスという蹟

新約聖書の福音書にイエス・キリストのことが書かれています。弟子どもが書いたけれども。あれを読みますと、なんとキリストは苦勞しておられるなと思う。誰も知らない事を自分だけが知っているわけです。

「天からくだつてきた者のほか誰も知らない」

と言つておられるでしょ。一生懸命で「あだよ、こうだよ」と、いろんなあの手この手を使つて、天のことをお話しなさつても、ほとんど受け入れない。拒絶反応です。しかも、その拒絶反応を示しているのが、神さまの選びたもうたイスラエル民族なんです。だから、余計しまつがわるい。「これこそわが民」と思つて神さまが選び、父祖アブラハムに始まつてずっとイスラエル民族以外の諸民族に対して

「神の道を証^{あかし}するために、示すために特別に選んだ」

と言われたその民族が、神さまのこゝろを受けつけない。しかも、

「自分たちは神さまの教えを守っている」

と信じ込んでいるんです。そして、本当の神のお使いがやってきても、それを迫害して、最後は殺してしまふでしょ。これが十字架ですよ。

私は歴史を否定しません。少なくとも人間が文字をもつて記録するようになってからの歴史です。紀元前2000年から2500年くらい前からユダヤの歴史は始まっています。アブラハムで紀元前1500年とか——あるいはもうちょっと先かもしれません——その脈々たる歴史があります。そして、イエスという方が現れて、十字架で亡くなられて——亡くなりっぱなしではありません。今も素晴らしい姿で輝いておられます——それから2000年。都合多くみても4000年か4000年ちょっとですね、そういう人類の歴史です。しかも、イエス・キリストから紀元前と紀元後と分ける。やはり、時代を画する存在だったということがそのことで

もわかります。そのイエスという方が本当にこれは躓きなんですよ。

ギリシア人なんかにとっては、哲学的に考える神だったら存在しても、

「神が人の形をとって現れた」

なんてことは全然信じない。それから、

「神の子が十字架に付けられて殺される」

なんて、そんなバカなことはないというのがユダヤ人です。だから、知恵や知識をもってしても神を認識できないし体感できない。今度は人間的な思いでみますと、全部躓いてしまって、最後はキリストを殺してしまうわけです。これは人間のひとつの姿を表していると思います。

「ギリシア人は知恵を求め、ユダヤ人はを徴を求める。どっちもだめだ」ということです。

愛の思い

イエス・キリストという方が福音書の中でいろんなことを話したり、み業をなさっていますけれども、それと人々との反応の仕方があまりにもかけ離れていて、本当に苦労なさっています。キリストの身に自分の身を置いて、自分がキリストになったつもりで——俳優さんというのは正にそうですね、自分と別人格になるんです——皆さんが本当にキリストになったつもりで福音書をずっとご覧になると、お気の毒にも一生懸命に自分のことを話しおられても、受けつけない。それが実は

人間の姿そのものなんです。

そんなこともありまして、私が今日ここに掲げました題名は、『「神の思い」と「人の思い」』です。いい題だなあとあって、私は自分で悦に入っている。いかに神さまが思っておられる御思いと人の思いは違っているか。しかも人間に対する思いは愛そのものなんです。

「永遠の生命を与えたい。本当に人間として素晴らしく輝いてほしい。しかも、この地上が終ったら向こうでもっと素晴らしく輝いてほしい」

という、その愛の思いに尽きるんです。ただし、ひん曲がった、ねじ曲がった心でおれば、向こうへは行けません、向こうは清らかな輝く世界ですから。それを真っ直ぐな思いになって向こうへ行つてほしいと思つて、いろんなことを語っておられるわけです。かつてはモーセを通して律法というものが与えられた。

「モーセを通して律法が与えられたけれども、恩恵と真理はイエス・キリストによつてもたらされた」

と、ヨハネ伝の冒頭に出できます。光として来てくださった。

「太初に言があつた」

と言つてますけれども、これは霊なる言、霊言です。根源的なお方が神と共にいらつしやつた。その方が時至つて、肉体をとつて現れてくださった。まだ誰も神を見た者はいない。ただ父の懐にいます神だけが——つまり、イエスですね——神を現したのであると。そういうことがヨハネ伝の第

1章に出てきますでしょ。1章の途中からは、イエスがいろいろな人々に出会う物語という形で展開していきます。だから、この聖書は、特に新約聖書というのには興味が尽きないですね。本当に何度読んでも、新しい読み方ができますし、一遍読んで、「読みました」なんて、全然そうではない。自分の中が変わっていくにつれて、読み方にまた深みが出てくるんです。

己を愛するごとく

たとえば、

「律法の中で何が一番大事ですか？」

とパリサイ人がイエスに聞いてきた。そのときに、申命記とレビ記の両方から引用して、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、汝の主なる神を愛せよ。それから、己を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。この二つだ」

と言われた。つまり、神への絶対的な献げ、愛。それから、人々に対する愛。それも

「己を愛するように人々を、隣人を愛しなさい」

と言われました。私は、「己を愛する」というのは、

「人間は全部、自分がかわいいから、どんな人間だって自分をかわいく思って大事にする、そのように隣人を愛する」

と、そう受けとってきたんですよ。ところが、違うんですね。違うということかもっと深いんです。本

当の意味で「己を愛する」ということは人間はできない。自分が嫌なんです。自己嫌悪というのがあるでしょ。自分が嫌なんですよ。

「私は自分をほめてあげたい」

と言えたらいいんですけども。ところが、それはほめてあげたい自分もおるでしょうけれども、けなしたい自分、嫌な自分、捨ててしまいたい自分、「もういやっ！」というのが必ずあるはずですね。そして、思い詰めると悲劇が起りますけれども。

そのように、人間というのは本当の意味で己を愛することができないんだと思います。というのは、嫌なものも、嫌いなところも、マイナスもプラスも全部ひっくり返して、全存在そのものをそっくり受け入れて、それを愛するという、これは人間はできないですよ。でなかったら、自殺ということにならない。もちろん、自殺というのは、望みを失って、生きがいもない、嫌だという、いろんなマイナス要因が爆発して、自殺ということになるんでしょけれども。基本的には己を本当に愛することができないという、そこから来ていると思うんです。自分で自分の生命を絶つんですから。

「己を愛するごとく隣人を愛せよ」

というけれども、

「あなた方は本当に己を愛せますか。どんな嫌な自分でも愛せますか？」

ということですよ。

「いいえ、この嫌なのは親父おやじからきている。自分には汚れた血が流れているんだ」

とか、そういう形で自分を呪いますね。でも、そんなことに関わりなく、とことんすみずみまで己を愛しぬくということはできない。もし、できれば、

「そのような愛で隣人を愛しなさい」

と。でも、それはできませんわ。そうすると、

「こんな吐き捨てたい自分でも、愛してくれているお方がいらつしやる。無条件で愛してくれているお方がいらつしやる。無条件で受けいれてくれている方がいらつしやる」

ということに目覚めて初めて、

「ああそうだ。人が捨てても、自分が捨てても、そのお方の愛が私を包んでいる」

と。「己を愛する」ということはそこで初めてできる。その愛があつて初めて、隣人にも本当に無条件に心を開くことができる。ということとは、結局は、

「神さまの無条件な愛に目覚めなさい」
ということなんです。

「どんなあなただつて、神さまはあなたを無条件に受け入れていらつしやる。その無条件の愛を受けとつて、それであなた自身を本当に愛してごらん。そうしたら、隣人も愛せる。

もちろん、源みなもとである神さまも愛するようになるよ」

と。そうすると、三つがグルグルグルグル回つて、そういう霊というのは非常に高いところに引き上げられていくんですね。ところが、「己いが嫌いやだ、嫌きらいだ」と暗い方へ向いていますと、暗い方へ引

きずりこまれていきます。

心の中の闇

闇というのは何でしょうか。今日は素晴らしいお天気ですね。私はホテルからずつと歩いてきた。歩行者天国になっていて、たくさんランナーが走つてたり、競輪の人が走つていたり。素晴らしいお天気です。

これは太陽の光さんさんを燦々と浴びているからです。太陽の光がなくなったら、どうなりますか。真っ暗でしょ。なにも光がなくなるのではなくて、地球が背を向けているから、光が届かないだけです。地球はグルグル太陽の周りを回りながら、また自転をくりかえしている。太陽に背を向けている間が夜で、太陽に向かつている間は昼です。だから、夜という、闇というものは積極的に存在しない。光がなくなっている状態が闇なんです。我々は光に包まれている。ところが、光をシャットアウトして閉ざしますと、それが闇になる。そういうことを皆さんは考えられたことはありませんか。

神さまは光であられる。

「我は世の光なり」

という。太陽の光が燦々と降り注いでいる。これが神さまの姿です。神さまの愛の光が燦々と降り注いでいる。それに対して心を閉じて、真っ暗な中に閉じこもっているのが闇です。つまり、光が届かない状態が闇であつて、神さまが積極的に闇をおつくりになつてはいるわけではない。地球がク

ルツと背を向けてますと、それは闇になり、また戻ってくると、光が射す。

みんな光の子としてつくられてはいるはずなのに、それを自分で心の窓を閉じている。これが人間の闇の姿です。子どもさんは実に生き生きしている。赤ちゃんは闇を知らないから。ところが、物心がついて、すべてのことに懐疑的になって、自分自身も嫌になって、それで段々、心の扉を閉ざして閉じこもってしまう。自分で闇の中に閉じこもる。心の扉を開いたら、光がフワッと入ってくる。非常に単純な簡単なことなんです。

でも、この一番簡単な、一番単純な、一番根源的なことを学校は教えない。

「宗教教育をしたらいけません」

と、60年間やってきたでしょ。経済がすべてのような考え方が支配していた。これが自分で光を閉ざした状態、闇です。それをもう一度、扉を開いて、光を入れないといけない。闇というものが積極的にあるのではない。光が届かない状態をつくっている、それが闇なんです、背を向けて。まあ、人間は夜がないと、昼ばかりだとやりきれませんから、それはそれで結構なんですけれども、心の中に闇をつくっていたのでは、これは申し訳ないですね。非常に単純なことです。

魂の糧

本題に入らないといけません。たくさん資料を皆さんにお配りしてあります。「神の思いと人の思い——真に豊かな人生の道——」と題しました。聖書の言葉をたくさん切り抜いて貼り付けてある。

これはまだほんの一部です。本当ならもっとになります。こういうお話は連続講義で、二、三日間くらいやれば、皆さんは本当に堪能してくださいなんですけれども、それをほんの一かけらだけこの短い時間でちょっと味わっていただく。それだけなんです。プリントを追いながら、ところどころ感想を申し上げたいと思います。

まず、イザヤ書55章からとりました。イザヤ書は40章〜55章が、第二イザヤという無名の預言者による預言の書とされていまして、バビロン捕囚末期の紀元前540年頃のものとしてあります。しかし、読んでいまして、全然、違和感を感じない。不思議なんです。あのイスラエルという、やや特殊な国——今でも戦争ばかりやってますね、あの地方はとんでもないことをやっている国々です——その一角に預言者たちが現れて、神の言葉を伝えた。イザヤという預言者の言葉が収録されている。その中で55章の一番始めのところから、

「渇きを覚えてくる者は皆、水のところに来るがよい。

銀を持たない者も来るがよい。

穀物を求めて、食べよ。

来て、銀を払うことなく穀物を求め

価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。

と。「大事なものを本当に求めなさい」ということを言ってます、2節のところに、

なぜ、糧かてにならぬもののために銀はかを重かさって払い

飢えを満たさぬものために労するのか。」

神さまというものを知らない我々の経済生活は正にそれなんです。「糧にならぬもののために」の「糧」というのは心の糧、魂の糧です。「永遠の生命」です。つまり、この世限りの生命ではない。この世の先の永遠の生命です。いや実はこの永遠の生命は今も貫いている。我々は3次元の世界の人間ですけれども、その中に――4次元か5次元か何か知りません――天の次元の生命が宿ってきた時に本当に人は生きる。それを知らなかったら、まだ半分しか生きていない。この地上の間にその永遠の生命を味わっていると、向こうへ往くときにはスツと往ける。ところが、この地上で地上のことばかりに汲々としていますと、向こうへ往くときに戸惑いを感じるわけです、

「こんな世界は私は知らなかった。こんなものは私の辞書になかった」

と。どんな学者であっても、人間は全部平等につくられていますよ。学問のあるなし、お金のあなし、そんなことは関係ない。この霊の世界、生命の世界はそんなことに関わりなしです。

霊の貧しい人

それは新たに生れなければしょうがない。

「人新たに生れずば、神の国を見ることあたわず」

と、あの学者のニコデモにキリストが仰った。非常に平等ですよ。この世のことはいろんな才能が不平等です。金持ちはうんと金持ちになるし、速い人はもの凄く速く走るし。いろんな学問の頭の

いい人はもの凄くいいしね。でも、本当に平等なのは、人はみな魂を持った存在だということ。霊のひと、これはみんな平等なんです。どんな人が向こうの世界で輝くかというのと、

「恵福なるかな、霊の貧しいひと」

という。「霊の貧しい」というのは、さもしいのではない。

「私のものはこれっぽっちもありません。みなあなたからいただきます」

というふうには、神さまの前に本当にへりくだっている、「己を何ものともしない、そういう人。キリストがそうなんです。

「私は何ものでもない」

とキリストはよく仰っているでしょ。

「神さまがしゃべれと言うことをただ伝えているだけだ」

と。それが人の気に入らないものだから迫害されたわけです。あまりにも次元が高すぎたから、それで人々は迫害した。最後は十字架につけて殺した。でも、キリストが言っておられたことは本当の本当の世界のことを伝えられたんです。これが「神の思い」ですよ。

「人の思い」は自分のキャパシティ (capacity: 収容能力、許容量) の中に入ってくるものしか受け入れられない。向こうの見えない世界のことを受け入れられない。特に科学の人はそうですね。でも、閉ざされた世界がすべてであるという証明はどこにもないわけです。

幸いなことに、臨死体験とか、そういうもので書物が出てきますと、非常にそれを破ってくれる

と思います。臨死体験された方の証言というものはほとんど共通性があります。ああいう本は非常にいいと思いますよ、我々の偏見を破ってくれるから。その証言していることが聖書と、あるいはキリストが言っておられることとかなり一致している面があるんです。あのスウェーデンボルグ〔註：1688～1772、生きながら霊界を見て来たと言う霊的体験に基づく大量の著述で知られる〕だとか何だとかあまり行き過ぎたところは、皆さんは警戒なさった方がいいたいけれども。そうでない素朴な人が臨死体験して語っていることはほとんど一致しているようです。まあそんなことですか、我々は向こうの世界を覗けないんだからしょうがない。でも、そんな世界を覗かないでも、

「キリストが語られたことは本当だ」

というふうな心から受け入れる人はもつと幸いなんです。

「見ずして信ずるものは幸いなり」

とキリストは言われた。でも、それは無茶苦茶なことを無理やり信ずるのではない。

「それに違いない」

という納得の世界です。本当にキリストの世界は納得の世界です。私みたいな法律学をやって理屈っぽいことをやっている人間が、

「キリストの言われることは本当にその通り違いありません」

と完璧に降参してしまうんですから、やっぱり、キリストというのは素晴らしい方です。

神の思いと人の思い

イザヤ書55章に戻ります。

「……わたしに聞き従えは」

良いものを食べるができる。

あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。

……

⁶主を尋ね求めよ、見いださぬと云ふは

呼び求めよ、近くいますと云ふは

⁷神に逆らう者はその道を離れ

悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。

主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してください。

⁸わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり

わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。

⁹天が地を高く超えているように

わたしの道は、あなたたちの道を

わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。」(イザヤ55・1～9)

「神の思いと人の思い」という題をつけたのはここから来ています。こうじゃないといけませんよ、人間と同じようなことを神さまが考えているのなら、大したものじゃない。

大体、日本に祀まつられている神様というのはみんな——天神様は菅原道真すがわらのみちざねでしょ。私よりはずつと賢い方だと思えますよ、でも——結局、人間なんです。八幡太郎義家はちまんたろうよしえ、八幡様は武将です。みんな人間のちよつと優れた者が神さまと崇あがめられているだけのことです。みなそれは素晴らしい人でしょうけれども、結局、人の延長なんです。レベルが似てるようなものだから、余計みんなお参りするわけです。ところが、桁はかり違いな方は敬遠けいゑんしてしまう。キャパシティ、受容能力がないわけです。似た者なら受け入れられる。まあ、私はそういうことだと思つて、決して日本にある神社や仏閣を否定しません。でも、その存在の次元が違う。人間の延長としての神様と、本当に根源的なところから降くだってきたようなお方と一緒にされては困る。プロとアマとは違ふと、そう言っておきたいと思いません。それは神さまの次元のプロとアマですよ。本当のプロはキリストですわ、自分から来ないもの。

「お前、行つてこい！」

と言われて、派遣されて現れてきた派遣社員ですよ、たった一人のね。

天からの派遣社員

だから、ヨハネ伝なんか読んでごらん下さい。

「私が語っていることは私ではない。語れと仰つたことをそのまま言っているだけだ。自分では何も教えてない。何も持つてない。文句があるなら、天の神さまに文句言つてちょうだい」

と、キリストは言つておられるんですよ。全然、威張おごっていない。

「自分は何ものでもない」

と言っているだけです。本当の派遣社員です、天からの。己がないんだから。しかも、あれほど豊かなお方はいらつしやらない。地上での伝道はわずか3年間ですよ。しかも、最期は残酷な十字架です。その刑に処せられて、それから変貌して現れてきたでしょ。そして今に至るまでいろいろな所にキリストは現れておられます。これはやつぱり凄いお方だと思えます。お釈迦さんもそれなりに凄い方だと、私は尊敬します。でも、それは別な道ですから。お釈迦さんはお釈迦さんの道があつて現れてこられた。キリストはキリストで現れてこられた。しかも、キリストという方は、

「私は自分から来てない。遣つかわされてやつて来た」

と仰つた。「私をお遣つかわしになった父なる神」と、いつもそれでしょ。我々には、「父なる神」と言われても、全然見当まてがつかない。それを、

「私を見た者は父を見た。私の中に父が現れていらつしやる」

と言われた。「では、あなたは何ものか？」と、

「何ものでもない。自分はからつぽだ」

と。「からっぽ」というのは簡単になれないですよ。全部、自我がありますから、「私は」というのが、ところが、キリストは、

「私は何のものでもない」

と。本当にナッシング、本当に真空です。真空の中に神さまが100%宿ってます。99%からっぽにして、1%自分を残しているのが人間ではないかと思えます、修行している人は。やっぱり、己があると
思うんです。ところが、あのキリストというお方は本当に真空です。だから、神さまが100%に宿っているから、いろんな御業みわざが起こる。

「私の業ではない。せよと仰ることをしているだけ。しゃべれと仰ることを伝えているだけだ」

と。それであんな凄い事が起こっているんです。人間は理解できないから、寄ってたかってやってやってしまった。十字架につけて殺した。

でも、現れてきたでしょ。そんな死にっぽなしではありませんよね、キリストという方は。もし、キリストが死にっぽなしでは、神も仏もないと断言します。故あって地上に現れ、そして故あって人々の罪、咎とが、悩み、病い、すべてを一身に背負って、十字架で死んだ。神さまが放っておくはずないですよ、あのように神さまと一緒に生きたひとを。

「私の思いではありません。父よ、あなたの御意みこころだけを」
と。それに貫いた。だから、

「私を見た者は父を見た」

と言えたでしょ。自分はからっぽですから、父なる神さまが100%宿っておられる。弟子ですら、最後の晩餐のときに、

「ひとつお願いがあります。父なる神さまを見せてください。そうしたら、納得します」

と聞いたら、

「こんなに一緒に長いこと暮らしてきたのに。まだ、わからんのか。私を見た者は父を見たのだ」

と、言われたでしょ、ヨハネ伝14章で。そのくらいに人間というのはあかんのですな。見ても見えていない。そういう出来損ないとおぼしき弟子どもが生れ変わったんですよ、ペンテコステを通して。使徒行伝に出てますように、聖霊を受けてから変わりました。天界のキリストが現れてきて、それから弟子たちは殉教も迫害も全然、問題にしなくなりました。

だから、そのキリストというお方は本当に凄いお方です。わずか3年の伝道ですよ。3年の伝道で、しかもあのユダヤの片隅のところでなさっていた。それが今、全世界に伝えられている。いろんな方にキリストは現れて、励ましたりなんかなさっている。

光と闇

私は、日本の方々はものすごく心の優しい方だと思う。自然が穏やかですから、排他性もない。

非常に柔軟なんです。ところが、残念ながら、このキリスト・イエスとか、キリスト教にだけはシャットアウトしているんですね、全体として。

「私たちは満ち足りています」

と言うんです。なんでそんなことを仰るのか、私はわからないからでしょう。

今、民族なんかにこだわる時代ではないでしょ。みんな裸になってごらん。同じ姿ですよ。毛色やいろんなものが違うでしょうけれども、ハートは、心は人間共通だし、地球は一つでしょ。宇宙旅行してきた方には、地球は実にいとoshii存在だそうですね、青々として。他の星は真つ暗なのか知りませんが、地球だけは実に素晴らしい。その地球上の、何十億の方々が知りませんが、それがどここの民族だといって、民族間の争いをやったり、領土の争いをしたり、一生懸命に原爆を作って、もう原爆どころじゃないもの凄いのも作って、そしてどれだけ減らそうかなんてやっているのが人間ですよ。なんで、本当に地球市民というレベルに来ないんだろうかと。なんでなんでしょうね。

「私のところの宗教はこれだ」

と言ってしがみついています。

日本人は非常に柔軟性に富んでいるけれども、ことキリストのことに關しては何か心を閉ざす傾向があるんですね。他の事については非常にオープンマインドです。ところが、ことキリストのことに關しては何かシャットアウトする。それを私は打ち破って欲しいんです。今やそんな時代で

はない。

太陽をご覧なさい。今日は燦々と光を降り注いでいますよ。闇とは何か。太陽の光をシャットアウトしている姿が闇なんです。そうでしょ。太陽は輝き続けている。それをシャットアウトしているのが闇です。人間でいいですよ、自我、己というものが邪魔をして、本当のものが入ってくるのを閉ざしている。それでは、自分の中は何かというと、光がない状態を闇といいます。扉を開けば光が入ってくる。非常に単純なことですけども。

「ユダヤ教はいやだ、キリスト教はいやだ。イスラム教を見ろ、あれはけしからんではな
いか」

と。相対的に比較したらそうかもしれないが、本当の根源のところへ帰って、そこから人間が本ものを受けとれば、それでいいのではありませんでしょうか。

だから、私は「キリスト教」という言い方は嫌いです。「宗教」という言葉もいやなんです。なに
か自分の教義とか教理とか、そういうものにこだわって、自分の善さを際立たせるために他者を排撃していく。それが嫌なんです。キリストは全然、そんなものはない。自分からっぽですもの。自分がからっぽでしょ、神さまが100%に来ているでしょ。それは愛そのものですよ。みんなを生かして行かれた。そういう単純なところへ帰ってこないよ、おかしいですよ。

その単純なところを今日、私は皆さんにお話ししようと思って、皆さんがここへ聞こうとして来てくださった。皆さんはご自分の意志でおいでになったと思いますけれども、やっぱり、そういうふ

うに思わせようと思われたどなたかの導きがあったのではないのでしょうか。

そうなんです。人間はみんな自分は自分で——「自己決定」と法学でもさかんに言う。でも——本当に人間というのはそんな自己決定していませんよ。何かに導かれ、何かに促されて、それで「ああ、そうしようか」と思っただけで、素晴らしいものに出会っていた。

「今日は宝ものに出会って来たよ」

「そうだろう、良かっただろう」

と、導かれたのは守護霊さんですな、皆さんの。それが導いておられると私は思います。

見えない世界の太陽

今日は実にいい天気で、本当に太陽が輝いてましょ。太陽は万物の命の源でしょ。その太陽によって皆さんは命づけられているわけです。ものごとの認識だって、太陽の光で初めて本当のものが見える。

見えない世界の太陽がキリストであり、そこから発せられている光線、これが生命の光線と言っているでしょう。その太陽の光を浴びないと、自然的生命の我々は死んでしまいます。同じように、見えない世界の見えない次元の太陽であるそのお方からの生命をいただかなかつたら、我々は死ぬんです。みんな生きていような顔しているけれども、それは地上の生命ですわ。地上の生命は大体、今は120歳ですか。まだ120歳まではいってませんね、最近。旧約聖書なんかを見たら、

「アダムは930歳まで生きた」(創世記5:5)

なんて書いてあるが、そんなのはどうでもいいです。大体、今は120歳が限度ではないのでしょうか。そこから先はどこへ行くんでしょうか？

「私は無神論だ。どこへも行かない」

なんて、そんなのは理屈なんです。皆さんは「慰霊祭」をなさったり、「黙祷」と言っただけで、黙祷したりする。だったら、次に行く場所がなかったとしたら、全部、偽りではないですか、そんなものは、そうでしょ。

人間というのは、地上の生命はせいぜい120年。けれども、120年の間に永遠の世界と縁結びをなさないと。そしたら、あなたの120歳までの——早い人は70歳かもしれない。早い人はもっと若いかもしれない。これは法学の方では、「必ずやってくる、でもいつかはわからない」というのは「不確定期限」といって、「何月何日」というのは「確定期限」という——皆さんは、せいぜい120歳を限度とする不確定期限の中に生きています。でも、それで終わって本当のお終いだつたら、これは寂しいよね。若いときはそんなに思わないかもしれない、「私は元気だ」と思っただけ。

ところが、だんだん年齢を重ねてきて、頭の毛がだんだん薄くかつ白くなつてきますと、それは生命がだんだん薄くかつ短くなつてきている象徴だと思えますけれども、

「本当に自分は死んだあとどこへ行くんでしょうか？」

と、誰も思いませんか？ 私はやっぱり、思うのが人情だと思っただけです。無理やり「思わないで

「おこう」と思う、それはできませんけれども。

でも、それは偽っているだけであって、必ず人間はこの肉体を脱ぎ捨てたら、行く場所がある。それが光の世界へ行くか、闇の世界へ行くか。これなんです。どなたさまも、この地上限りで終りというのはいない。人間はもともと自分で生まれてきたのではないですから。どなたさまもこの地上の世界が終ったら、次は行く場所がある。それが願わくば光の方へ行ってほしい。闇の方へ行ったら、これはあまりにも寂しくて惨めすぎます。

「光のある間に光を信じなさい」

とか、ヨハネ伝にも出てきますよ。そういう非常に単純なことなんです。ただ次元が違いますから。我々は3次元の世界にいます。ところが、別次元ですからね。別次元からの語りかけだから、これは大変なんです。

「神の思いと人の思い」という題ですけれども、神さまの思いというものは、肉体的な人間、3次元の中に生きている人間にはダイレクトには受けとれないです、残念ながら。ヨハネ福音書3章にニコデモとの会話が出てきますけれども、ニコデモのようにユダヤ人の学者で尊敬されている学者でさえ、天界のことが全然わかっていなかった。それで、キリストにやつつけられるんです。

「ひと新たに生れずば、神の国を見ることあたわず」

「新たに生まれるとは何ですか。もう一回、お母さんのお腹なかに入るんですか」
なんて、ニコデモはどきまぎして言ってますね。

「あなたはユダヤ人の学者でありながら、こんな単純なことがわからないのか。肉から生まれるものは肉であり、霊から生まれるものは霊である。風は思いのままに吹いている。どこから来てどこへ行くのか誰も知らない。新しく生まれるというのはそのようなことだよ」

「どうして、そのようなことがありえますでしょうか？」

と、そこから、ニコデモはもう本当に混乱してますよね。あれはなにもニコデモだけではない。我々はみなそうなんです、知らん世界ですもの。

「知らん世界をどないしてわかるのや!？」

と。知らん世界からやってきたのがイエスというお方でしょ。しかも、自分から来たのではない。

「遣つかわされてやって来た」

と言う。遣つかわされてやって来た人なのであって、立候補して来てないんですよ、あの方は。「行け」と言われて、「はい」と言っただけです。そして、みんなが歓迎してくれるかと思うと、みんなに最後はポコポコにされた。自分に都合のよいことをやってくれる間はチャホヤしてます。ところが、都合がわるくなると、みんなポコポコにされる。それを全部、自分が背負いこんだ。これがイエス・キリストの生涯ですよ。

心の中の大掃除

イザヤ書55章に戻ります。

「主を尋ね求めよ、見いだしまするときに。」

呼び求めよ、近くいますうちに。」

7 神に逆らう者はその道を離れ

悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。

主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してください。

8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり

わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。

9 天が地を高く超えているように

わたしの道は、あなたたちの道を

わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。

10 雨も雪も、ひとたび天から降れぬ

むなしく天に戻ることはない。

それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ

種時く人には種を与え

食べる人には糧を与える。

11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとに戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。」(イザヤ55・6～11)

この8節、9節ですね。

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる」

これが今日の題の「神の思いと人の思い」という、それをここからとったわけです。

「天が地を高く超えているように、そのくらいに神の御思いと人の思いとはかけ離れている」ということです。

「では、どうやって認識できるの？」

と、哲学者は一生懸命に頭脳を使って研究したでしょうけれども、これはイエスがニコデモとの対話で仰った、

「人新たに生れずば、神の国を見ることができない」

と。新たに生まれる。

「肉から生れたものは肉だ。霊から生まれるものは霊だ」

と。では、どうやって霊から生まれるのか。

「それを私がひっさげて来たんだよ」

というのがキリストでしょ。キリストの唯一の使命ですよ。天の世界、永遠の生命の世界をこの地上にもたらしてくれた。みんなが本当の意味の永遠の生命、神の子となるために、それにはまず大掃除をしなければいけない。なにも環境問題のことを仰っていない。人間自身の心の中の大掃除です。もう先祖代々受け継いできた自我のかたまり、我のかたまり。己を高しとして神を認めない。己中心、そういった今までに積み重ねてきた人間の業——我々の言葉では「業」ですね——これをぶっこわして、本当に神さまの生命は宿らなければならぬ。

そのためにキリストを待っていたのは十字架だったでしょ。ええ、何たることでしょう。あんなに素直な方はいらっしやいませんよ。我々の知らん神さまを「父」と呼んだ。

「父よ、あなたの御意を天において成るように地にも成らせてください。私をお使いください。」

と、自分を献げているんです。

「私の語っていることは私の思いで言っているのではない。語れと言ったことを、為よと仰ったことをその通りしている」と言われた。

「では、あんたはロボットか？」

「はい、ロボットです」

と、平然と仰っていますね。人間は大体、

「私もちよつとはええところがあるんやで。ちよつとは認めてよ」

と言いたいんです。人間は。ところがキリストは、

「私は何ものでもない」

と言う。ナッシング、からっぽだと。本当にからっぽなんです。そうしたら、100%に神さまが宿っておられる。

私もいつしよだよ

多くの人が洗礼のヨハネによってヨルダン川でバプテスマを受けた。

「そのうちに神の審判がある。大変なことになるぞ。さあ悔い改めろ」

と、やりました。神の怒りを、審判を宣言した。すると皆は恐いものだから、ぞくぞくとバプテスマを受けた。そこにヒヨコヒヨコやって来た人がある。誰かという、イエスなんです。ヨハネは、

「いえ、あなたはちがう。悔い改めのバプテスマを受けることはない」

「いや、私も受けさせてほしい」

と、イエスは平然とヨハネから水のバプテスマを受けたでしょ。水からあがったら、霊界の天が開けて聖霊が鳩のごとく、あるいは滝のごとく、降ってきた。

「これは私の心にかなうもの」
と、そういう御声があったという。洗礼を受けて、天が開けたのはイエスの場合だけなんです。どこに神さまは悦んだかというのと、

「私も受けさせてほしい」
と、己を何ものともしていかない。

「こいつらは罪びとや。私はちがう」
なんて、そんなのではないんですよ、そこらの教祖みたいだね。そうじゃなくて、

「私もいつしよだよ」
と言つて、ヨハネに身をまかせて、そして水からあがつて祈つておられたら、天が開けて聖霊が鳩のごとく降ってきた。

「これぞわが心にかなうもの」
という声が天から聞こえた。

そしたら、すぐ伝道したかというのと、そうではない。「荒野の試み」が待つてました。四十日四十夜、あそこで散々いろんなことを体験なされた。それが「三つの試み」です。四十日四十夜は長いですよ。私たちは子どもの頃の四十日の夏休みはうれしかったですね、もう終りの方は飽き飽きするほど長かった。その四十日四十夜をたった独り荒野でサタンと闘った。それが終つてから伝道が始まったんです。これは凄いですよ。

インドにサンダーシングという人がいました。彼は1904年に15歳で改心する。インドの人です。自分の宗教に逆らうということで、毒を盛られて死にかかるとも、それを救われて、伝道にたずさわった。1909年頃かな、日本にも来られたそうです。最後はチベットで殉教したという。この人は本当に不思議な体験をしている。何度かキリストにお目にかかっているんです。岩の上に座禅をくんで何時間も瞑想していると、パッと天界が開けて、キリストと問答したりとか。そして、この人は自分で何度か四十日四十夜の断食をやっているんです。凄いですよ、このサンダーシングというのは。大体、聖書学者は、

「四十日四十夜なんて、そんなバカなことはない。あれは四十という語呂合わせだろう」

なんてことを註解に書いてあつたりする。何で信じているんですか。サンダーシングですら、四十日四十夜の断食を3回くらいやっているんです。だから、もう少し素直にスツと受け入れた方がいい。学者というのは賢いようで馬鹿なんです。いやいや、法律学者はそうではありません(笑)――
―― 大体、絶対界の世界でしょ。絶対界の次元というのは絶対界の方しか解らないんですよ。我々、相対界の人間は素直に「はい。はい」と受けとる。これしかない。批判したり批評したりなんて、そんなおこがましいことはできなかったものではない、と私は思っている。

へりくだる靈に宿る神

またプリントに戻つて、イザヤ書の57章にいきましよう。見出しは全部、私が付けました。イザ

ヤ57章15節、「へりくだる靈に宿る神」という。

「高く、あがめられて、永遠にいまし

その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

これは神さまのことです。

わたしは、高く、聖なる所に住み

打ち砕かれて、へりくだる靈の人と共にあり

へりくだる靈の人に命を得させ

打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザヤ57:15)

もう旧約聖書でこうなんですよ。新約聖書にきたら、もつと共通なものがあります。それはこの世で驕り高ぶっている者、自分を何もかと思っている者——つまり傲慢というかな——そういうものは全部、シャットアウト。心砕けた者、うちひしがれた者——簡単にいうとペシヤンコです——そういう者に神さまは宿る。これは素晴らしいと思います。この世の榮華を極めるような者は、

「ちよつと待ちなさい!」

と「天国の門番に」言われる。でも、この世で泣いている人、悲しんでいる人、子どもを失ってどうにも立ち直れない人、そういう人のところへ神さまは近寄ってきて、

「一緒に生きようよ。まだ死ぬのは早い。自殺してはあかん。一緒に生きようよ」

と寄ってきて、生かしてください。砕けたる靈に——傲慢の反対は「砕けたる靈」という——うち

ひしがれたる魂に宿ってください。だから、肉体がボコボコにされるのも、いうならば、肉体がボコボコにされることを通して心が砕かれる。そのためなんです。始めっから心が砕かれている人は、肉体をボコボコにされる必要はない。

イエスという方はもう始めっから、不思議なことに全部、神さまに献げっぱなしですよ。

「私は何ものでもなご」

と言っているでしょ。己をサムシング(何者か)にしてないでしょ。そういう方に神さまが宿ったわけです。あのヨルダン川で天が開けて、聖靈が鳩のごとく降ってきた。さっきの荒野の試みがあつて、それから伝道に出かけられた。それは不思議な業が出てくるのは当然のことです。

このイザヤ書57章は、第三イザヤ書の中のものですが、56章〜66章が第三イザヤ書と呼ばれており、紀元前587年から538年にわたるバビロン捕囚から帰還した後、かなりの時を経て、書かれたものだとされています。この57章15節は、第三イザヤの預言の言葉です。

「高く、あがめられて、永遠にいまし

その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

至高なる神がこう言っておられる。

わたしは、高く、聖なる所に住み

打ち砕かれて、へりくだる靈の人と共にあり

へりくだる靈の人に命を得させ

打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザヤ57・15)

と。これは肉体的にボコボコにされている者、それから精神的に目茶苦茶に叩きのめされている人、いろんな両面どちらでもよろしいと思います。要するに、もう自分の中に光を見ることができないくらいに、あるいは肉体的に、あるいは精神的に打ちのめされているような、そういう人に対して、「そういう人と一緒に私はいるよ」

と言われる。いと高きところにいる神さまが実は一番どん底に降くだつてくる。

キリストがああヨルダン川で水のバプテスマを受けた。ヨルダン川は世界中で一番低い所に流れている川だそうです。一番低い川に身を沈めて、一番どん底に身を置いた。そして上がってきた。だから、降くだつてきてくださる神なんです。

「お前は天に昇ありてこい。そしたら、そこで会あってあげよう」

と言う神さまはだめです。向こうから降おりてきてくれて抱かかえてくださる。あの「善きサマリヤ人」の警話たえはなしがあります。強盗に襲おわれてボコボコにされて、へたつて傷やついていた。そこへ——お坊さんたちはみな遠く離れて通かつて行った——サマリヤ人だけが近寄かつてきて懇ろねんじに介抱かいぼうしたというサマリヤ人の話がある。あのように近寄かつてきてくれる。高いところの神さまがくだつてきて、一緒にいてくれる。これが神さまの姿なんです。

しかも、どんな人のところに来るかというのと、ボコボコにされている者になんです。なにも肉体のボコボコがいいのではない。魂が、

「あなた(神さま)しかありませんわ、やっぱり」

と。その意味では、いろんな不幸な出来事は避けたいけれども、見方によっては恵みなんです。そういうことに出会あわなかったら、人間というのはなかなか本ものを求める気持ちにはならない。己というものがありませんから。それでしよ。

「私は何でもできる。やれば、何でもできる」

と、自信満々の人は一番、天国に遠い。落第らくだいばかりしている人、それで自己嫌悪に陥おつて自殺してはいけません。自己嫌悪になったときに、

「本当の世界をあなたにあげる。そのためにあなたはボコボコにされてしまったんだよ。

そんな、ボコボコにされた者に神さまは降くだつてくる」

と、旧約に既に書いてあるやんか、そう言いっているやんか——つい関西弁が出てきてしまいますね(笑)——そうなんです。だから、僕が訳わけしたら、

「ボコボコにされた者、汝きはさいわいなるかな」

と、こういうふうふうに訳わけしますね。そういう関西弁聖書せいしょというのを作りましょうかね(笑)。

「さいわいなるかな、ボコボコにされた者。お前はしあわせなやつっちゃな」
なんてね。

悲しみに代えて喜びの油を

その次はイザヤ書61章です。「悲しみに代えて喜びの油を」という。これはキリストはルカ伝で引いておられます。ルカ伝で、伝道を始められた一番先にここを引かれた。これは「第三イザヤ」といまして——イザヤ書は三つから成り立っていて、三つ目の部分です——時代的にもバビロン捕囚から解放された後のイザヤなんです。

「主はわたしに油を注ぎ

主なる神の霊がわたしをとらえた。

わたしを遣わして

貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。

打ち砕かれた心を包み

捕らわれ人には自由を

つなげられている人には解放を告知させるために。」(イザヤ61:1)

と。これをルカ伝でキリストは引いておられますが、これはキリスト預言です。キリストはここを引いて、どう仰ったか。

「あなたが耳にしたこの日にこの御言みことばは成就した」

と言われた。つまり、

「イザヤ書でこのように言われていることは実は私のことを語っている。これを聞かれた

あなた方はさいわいだ。これはもう成就したんだ」

と言われた。ところが、あのルカ伝を読んでますと不思議なことに、そのあと事態が急変して、キリストが追い出されてしまうようなことが書いてある。あそこはなぜなのかわからないんです。でもとにかく、キリストはこれを引かれた。

「主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に

これは真実、貧しい人でもいいし、心の貧しい人でもいい。とにかく、自分によりどころを持たない人です。そういう人にこそ、

良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つなが

れている人には解放を告知させるために。」

肉体的な捕らわれとか、そういったものもあるかもしれませんが、もっと本当は、心の、霊の捕らわれから解放する。霊の扉、心の扉が開かれたときに光が入ってくる。それを固く閉ざしていると、向こうから入れない。カーテンを閉めたら光が入らないでしょ。カーテンを開けたら光がサーッと入ってくる。我々も心の扉を、胸の扉を開けさえすれば、スーッと入ってくる。閉ざしているのが地獄のすがたでしょ、光がこないものだから。光はあるんだけど、閉ざしているんですね。闇とは何か。光が届かないすがたでしょ。光を閉ざした相すがたが闇なのであって、積極的に闇というのは存在しない。光がない状態が闇なんです。ところが、ヨハネ伝を読みますと、

「光が来たのに、人間はその行いが悪いために光を嫌って闇を好んだ」

と書いてある。なにかこっそりと悪いことをする人間は闇が好きなんです。闇の中でこっそりなにか悪いことをする。

「ダイヤルQ2」というあの裁判を第三小法廷で私はやったんです。突然、10万円の請求がNTTから来たので、親父さんがびつくりした。何かと調べてみたら、「ダイヤルQ2」の番組を子どもがこっそり親に隠れて夜中に聞いている。どんだんどんどん値段が上がっていく。アダルト番組みたいな。そういうのがたくさん来ましたよ。それで、NTTはほとんど負けました。いや、負けました(笑)。それで三か月くらいで向こうは改善されたんですよ。第三小法廷がほとんど引き受けたんです。

なんだか、悪いことをするのは、明るいのが嫌なんです。暗いところでしか悪いことができない。大体、光を閉ざしてその中で何かをやる。だから、闇というのは光が届かない状態です。自分自身を省みて、光が届いていますか、光を閉ざしていませんか。心をオープンマインドに、心の扉を開けば、スーッと光が入ってくる。非常に単純ですよ、真理というものは。

要するに、神さまはそういう心の砕けた人、不幸に泣いている人、そのところへ来てくださるということですね。

「²主が恵みをお与えになる年

わたしたちの神が報復される日を告知して

嘆いている人々を慰め

「³シオンのゆえに嘆いている人々に

灰に代えて^{かんむり}冠をかぶりせ

嘆きに代えて喜びの香油を

暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。

「灰」は悲しみの象徴、「冠」は栄光ですね。「嘆き」の反対は「喜びの香油」。暗い心に代えて、明るい心になって、明るい心は神を賛美するという。

彼らは主が輝きを現すために植えられた

正義の^か樫の木と呼ばれる。」(イザヤ61・2〜3)

これはイスラエル民族に対して語られているけれども、イスラエル民族は実験台として選ばれただけなんです。しかも、イスラエル民族は素晴らしいから選ばれたのではない。頑^{かた}なで本当にどうしようもないやつなんです。旧約聖書にそう書いてある。

「⁴どうしようもないやつを敢えて選ばれた」

と書いてある。あんなどうしようもないやつが救われるのなら、他の民族はみんな救われると。ところが、イスラエルはそう思わなかった。

「自分たちは神の選民だ。他の民族とは違う」

と、他の民族を「異邦人」と言って軽蔑したでしょ。それで、キリストは、

「そうじゃない」

と言った。サマリアの人たちというのはユダヤ人から除け者にされた。異民族と混血したから、純血を失ったと言って排除された。ところが、福音書をご覧なさい。ほめられているのはみんなサマリア人ですよ、「善きサマリア人」の譬^{たと}えとか。

「十人の癩病人が癒されたが、神さまを讃えて途中で帰ってきたのはたった一人のサマリア人だった」

という。ことごとくサマリア人です。そういうのはとても楽しい。出自^{しゅつじ}、民族の何かではなくて、心の姿が本当に神さまの前に平伏しているような砕けの魂、これを神は喜び給うということです。

キリスト受難の秘儀

次の53章は凄い所です。私は、「キリスト受難の秘儀」というタイトルを付けました。これは誰のことを言っているかわからない。預言者もわからないで、これを預言させられている。キリストのことを言っているようでもあり、そうでないようでもあるという。わからないんですよ。でも、イエスという方はこれを自分についての預言として受けとられた。そして、その通りに歩まれた。実に不思議です。ある人のことを語っている。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。

主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。

²乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように

この人は主の前に育った。

不思議な人が現れたというんです。ところが、その人は、

見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

³彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

ところが、

⁴彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに

わたしたちは思っていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。

これは正に十字架の姿を表しているようですよ。⁵節にいくともっと凄い。キリストは十字架の上で槍で貫かれましたよね。

⁵彼が刺し貫かれたのは

彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり
彼が打ち砕かれたのは

わたしたちの咎^{とが}のためであった。

これは今の罪刑法定主義でみたら、全然成り立たないですよ。人の罪を背負うなんて、替え玉はあかんのですわ。親分の代わりに自分が時々自首して、「あっしがやりました」と言っても、あかんのですよね。ところが、ここで語られていることは、人の罪、人間の諸々の罪をこの人は身代わりに背負っている。ところが、人はそれに気づかない。「あれは神に叩かれているんだ。神から刑罰を受けているんだ。ざまをみる」とまでは書いてないけれども、そういう雰囲気ですよ。

わたしたちは思っていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。

ところが、

⁵彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり

彼が打ち砕かれたのは

わたしたちの咎^{とが}のためであった。

彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ

平安ですね、神さまとの間の平安が与えられ、

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

⁶わたしたちは羊の群れ

道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。

⁷苦役を課せられて、かがみ込み

彼は口を開かなかった。

屠り場に引かれる小羊のように

毛を切る者の前に物を言わない羊のように

彼は口を開かなかった。

⁸捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか

わたしの民の背きのゆえに、

これはイスラエルですね。

彼が神の手にかかり

命ある者の地から断たれたことを。

⁹彼は不法を働かず

彼は不法を働かず

その口に偽りもなかったのに
その墓は神に逆らう者と共にされ
富める者と共に葬られた。

「富める者」はいい意味で使われてません。驕り高ぶる者という、多分そういう意味合いだと思います。

¹⁰病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ

彼は自らを償いの献げ物とした。

彼は、子孫が未永く続くのを見る。

主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。

¹¹彼は自らの苦しみの実りを見

それを知って満足する。

わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために

彼らの罪を自ら負った。

¹²それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし

彼は戦利品としておびただしい人を受けける。

彼が自らをなげうち、死んで

罪人のひとりに数えられたからだ。

多くの人の過ちを担い

背いた者のために執り成しをしたのは
この人であった。」(イザヤ53:1-12)

と。これは誰のことを言っているのか、ずっとわからないんです。預言者もわからない。とにかく、こんなことを預言させられた。しかも、紀元前70年とか80年とか、そんな時にです。

我々を救いあげるために

使徒行伝を読みますと、エチオピアの宦官^{かんがん}がイザヤ書を読んでいるとき、ピリポという使徒が通りかかったら、ピリポに

「誰のことを言っているのか教えてほしい」

と聞いたという問答があります。それがイザヤ書の丁度このところのところだったという。

キリストはこれを自分の預言として受けとられた。どう受けとろうと、それはご勝手なんですけれども、キリスト・イエスはこれを自分についての預言として受けとられた。そして、この通りのことをなさったでしょ。あの十字架の場面でも全然、逆らっていらっしやらない。恥辱に身をまかせて、あのゴルゴタの丘を登るときには正にこの姿です。屠り場に引かれる小羊のように口を開かない。捕らえられ裁きを受けて命をとられた。その通りに。しかも、その当時の人々は、キリストをなぜ十字架につけたかという、神に背く者、己を神と等しい者にしたとか、神をないがしろにしたという、その罪なんです。もちろん、殺人罪ではありません。宗教的な罪なんです、彼は己

を神と等しくしたという。キリストに神さまが100%に宿って、御言を伝える。

「これは私の言葉ではない。神さま、父がしゃべれと仰ることをしゃべっているだけ。せよと仰ることをしているだけ。私は何ものでもない」

とキリストは言っているのに、

「あれは己を神と等しくした。安息日を破った」

と、それで十字架につけて殺したわけですよ。民衆もそれに賛同してしまつた。実に不思議なことが起こっている。この言葉を全部、自らへの預言として受けとって、この通りのことをキリストはされた。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

ところが、

⁴彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであつたのに

わたしたちは思っていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。」(イザヤ53:3~4)

ところが実は、我々を救いあげるためであつたという。私たちのどうしようもない背きという、煮ても焼いてもどうにもならないこの自我という罪、己を立てるという、これが罪の根源なんです。

「こんな悪いことをしました、こんな悪い考えを抱きました」

というのは枝葉のはなしであつて、根源的に自分の存在そのものが神さまに逆らっているというその姿、これが「原罪」というんです。これはなかなか気がつかない。

「何で私が悪いのか。何も私は悪いことしてないではないか」

という、「悪い思いを抱いていません。悪いことをしてません」というレベルなんですけれども。存在そのものが神さまに逆らうような質、これはカトリックの方では「原罪」とかいいますけれども——呼び名は何でもいい——本質的に人間というのは己を立てる。神さまに栄光を帰さない。己に栄光を帰する。自分をサムシングにしたい。「ちよつとは褒めてよね」というのが人間の思いです。

ところが、イエスという方は全部、神さまに献げっぱなしです。私は思いますのに、彼は人に捨てられたでしょ。人間に彼は捨てられた。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている」

と3節にあります。人から捨てられるだけなら、まだ我慢できると思う。自分が正しいと信ずる道に殉ずるならば、人から捨てられるのは構わない。究極のところは、自分が正しければ、ところが、神さまからも捨てられる。行きようがないですよ。

「神さまだけは私を知ってくれている。人々は間違っている。自分は迎合的ではないから、ボコボコにやられても構わない。私は正しいんだ。神さまはわかってくれている」

ところが、神さま自身が捨てるんでしょ。これはひどいですよ——皆さんはそう思われませんか？——神さまが捨てるというのは。今まで離れたことはなかったんです、イエスという方は。

「父と私は一つである」

と。離れたことはなかったでしょ。それを引き裂かれて、

「地獄へ落ちろ！」

「何でなんですか!？」

と。ゲッセマネで、

「額から流れる汗は血の滴のごとし」

と書いてあります。天使が現れて、「がんばれよ、がんばれよ」と、背中をさすっていたという。今まで思いも及ばないことですよ。

「父と我とは一つなり」

と言った方が、引き裂かれて地獄へ突き落とされた。これは耐えられないと私は思います。これには私は頭を垂れるしかない。そして、十字架の上で、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のやっていることがわからんでいるから、どうぞ、

赦してやってください」

でしょ。お釈迦さんも、あの大悲大慈は素晴らしいですよ。でも、お釈迦さんは苦しんだといっても、自我の悩みで苦しんで、悟りをひらいて、

「さあ、寄つておいで」

と。これは春の世界ですよ。

「燦々と太陽が照っているから、いらつしやい」

と。それで本当に救われるのなら、もうこんな素晴らしいことはないけれども、このイエスという方が歩まされた道というのは正に残酷な道です。正義とか義とかいうものに相いれない道です。ところが、イエスはそれを自分で受けいれた。

「人が私から生命を奪うのではない。私は自ら捨てるんだ」

と、ヨハネ伝に書いてあります。だから、本当の意味で、ヨハネ伝だとかそういうものを読みますと、泣けてきます。日本人でありながら、泣けてきます。

人間の本質的な姿

大体、民族を意識して、

「あれはユダヤのものだ。ヨーロッパの宗教だ」

とか、そんなケチな根性は皆さん、捨ててください。地球はたった一つでしょ。地球は一つ、太陽は一つ。これによって万物は何十億年も生かされてきた。人類の歴史は何年か知りませんが、一つ

の太陽によって生かされてきた。そのように、本当の根源的な生命のお方が生命を与えてきたはずなんです。それを、

「ユダヤから出たからユダヤ人は嫌いだ」

とか、

「いや、どこがいやかというかと、あの宗教はヨーロッパだから」

とか、そんなケチ臭い思いを捨ててください。人間みな同じです、根源的には。その同じ——毛色は違おうと、人種は違おうと——人としては同じなんです。みなハートを持っている。魂を持っている。霊がある。その人間に霊の根源である——宇宙の「大霊」と言ってもいい、何とでも名前は付けたらいい——そのお方と一緒にいた根源的な霊のお方が、

「太初に言あり。神と共にあり」

という、根源的な霊なるお方が時至つて遣わされてきたんです。

「お前、地球へ行つてこい。今まで預言者は何人もいた。でも、効き目がなかった。お前が行け。最後の切り札だ」

ところが、最後の切り札をボコボコにやつつけた。これが福音書の姿でしょ。

「これさえ殺せば、もうあとは私たちのものだ」

と、書いてありますもの。そのお方が、

「父よ、彼らを赦してやつてください。彼らはわからないでやっていることですから」

と、最後まで執り成しているんですね。これには参ってしまいますよ、本当に。

「あれはユダヤの話だ。あれはヨーロッパの宗教だ」

とか、そんな次元に皆さんは囚われなくてほしい。本当に人間の本質的なもの、根源的な姿がそこに描き出されている。神さまなんて、自分たちの思弁で捕まえられるようなものは大した神さまではない。わからない。本当にわからない。わからない天の次元を携えて、

「私を見た者は父を見た」

と、そう言ってくれたのがイエスでしょ。そのイエスは、

「自分は何ものでもない。しゃべれと仰ったことをしゃべっている。せよと仰ったことを

やっている。それだけだ。私は何ものでない。ナツシングだ」

と、キリストは言っている。そういうところに本当に気づいてほしいんです。これは普遍的真理です。

天への道を開いてくれた方

そして、その方は、我々罪びとを——「罪びと」というのは「神に逆らう人間」ということです。

神さまより己の方を大事にする。一つしかパンがなければ自分が食べる。二つだったら、一つは神

さまに一つは自分というけれども。一つしかなければ、私が始めて食べて、神さまには「ありません」

と言う——こういう自己中心な人間の自己愛を全部消し去って、十字架の上に全部引き受けて消し去って、そして、天への道を開いてくれた。

「誰でも無条件で入ってきなさい」

というのが、十字架で開いてくれた天への門、天門でしょ、無条件に誰にでも。無条件というのが凄いい。「本気で入ってくるならば」という。それが、みんな入って行かないでしょ、いくら開かれていても。背を向けていたらだめです、クルッとこっちへ向かないと。

夜というのは何でしょうか。地球が太陽に背を向けているんです。地球はグルグル回っていますから。太陽は動かない。地球が太陽の回りをグルグル回っている。しかも、回りつつ、また自分も回っている。そして、太陽に背を向けているときに夜であり、また太陽の方に向いてきたら朝になり昼になる。闇というものは積極的に存在しない。太陽の光が届かない状態を自分でつくりだして、それを夜とよび、闇とよぶ。

そして、それは比喩的に言うならば、人間の生命と死です。だから、神さまは光であり生命であり、人間を生かそう生かそうとしている。それでなかったら、神さまは刑罰でポコポコにして殺すなんていう、そんな神さまだったら、ごめんこうむりますよ。そうでしょ。そうではなくて、神さまは「人間を生かしたい、生命を与えたい」

と。ところが、人間は自分で背を向けて、

「光よりも闇を愛した」

という。何でか。

「自分の行いが悪いから、光に照らされるのがいやだから、背を向けた」

と、ヨハネ伝に書いてあります。だから、聖書というのは本当に人間の姿を表してくれている。

旧約聖書はユダヤ人を通して語られた神さまの言葉で、非常にユダヤ人の民族性が強いから、いろんな妨げや躓きがあります。そんなのは全部とり払えばいい。砂金から金を採るように、旧約聖書というのはぶ厚いですが、その中から普遍的なものを、真理を取り出してきて、それを我々のものにすればいい。民族的な色彩の強いものとか、非常にユダヤ的なものとか、そういうものはカットして、本ものだけを受けとればいいんです。

新約聖書になると、それが本当に光り輝いています。キリスト自身も、旧約聖書の中からずいぶんいろいろなものを取ってこられた。

「旧約ではこう言われている。しかし、私はこう言う」

と、常に旧約と新約とは違っていきましょう。真理の世界というのはそういうものだと思う。真理というのは本当に生命を与えるものです。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言われました。

「あなた方は真理を知る。真理はあなた方を自由にする」

と。ということ、私(キリスト)というのは真理のかたまり、権化ごんげなんです。しかも、

「自分は何ものでもない」
 という。そのお方から流れてくるものを受けとれば、なにか自分は解き放たれて、光の世界へ入っ

ていく。光に満たされていくという、そこへ招いておられる。

「さあ、いらっしやい、いらっしやい!」

と――寄席よせではありませんけれども――そういう世界なんです。

日本は最後の終着点

さっきのイザヤ書55章に、

「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」とありました。価なく無条件にいらっしやいと。

「銀を持たない者も来るがよい。……」

なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、

飢えを満たさぬもののために労するのか

と。神さまのことを知らなければ、そういうことですよ。せつせと、何とかして満足を得たいからいろんなことをやろうという。でも、それで魂は満たされない。究極なる方はこのお方だよ。最後の切り札として送り込んできたのがイエスという方だった。そのイエスをボコボコに殴って殺してしまっただから、ユダヤ人はやはりしばらくはその罪を背負って、世界中をさま迷わなくてはならない。「悪かった」と言って早く帰ってくればいい。でも、ユダヤ人は言わない。

「イエスは預言者にすぎなかった」

と、未だに認めていないそうです。しょうがないですね。

だから、ユダヤ人に対してのいろんな神さまの啓示が今度は異邦人の方に向けられた。そして、最後に日本にやってきた。我々は最後の終着点かもわかりませんが、世界をグルッと回って。その前に日本は法然や親鸞やいろんな仏僧が出てます。鎌倉仏教以来、この霊の世界が耕されているんです。最後に、非常に耕されたところに素晴らしい神の種が宿ろうとしている。それを、「いやです!」と言って、戦後みんな拒んでしまった。「宗教教育はいけません!」と言って、全部、蓋ふたをしたんです。60年間、蓋をし続けたら、今度はそれをひっくり返すのはなかなか大変ですよ。道路工事は、埋めてはまたひっくり返してやっていますけれども、人間の魂に固く閉ざされたこの蓋というのは、そう簡単にはいかない。60年間閉ざしてきたんですから。

旧約における福音

次にミカ書6章6節から、

「⁶何をもって、わたしは主の御前みまえに出で

いと高き神にぬかずくべきか。

焼き尽くす献げ物として

当歳の子牛をもって御前みまえに出るべきか。

⁷主は喜ばれるだろうか

幾千の雄羊、幾万の油の流れを。
わが咎を償うために長子を

自分の罪のために胎の実をささげるべきか。

人身御供というのが昔の宗教にはありましたからね。だから、こういうことが書いてある。ところが、そうではないと。

⁸人よ、何が善であり

主が何を前にお前に求めておられるかは

お前に告げられている。

正義を行い、慈しみを愛し

へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6・6~8)

これが本当に求めておられることだと。紀元前の何百年か前に預言者に与えられた言葉です。それから、詩篇103篇。これは旧約における福音だと言われている所です。2節から、

「わたしの魂よ、主をたたえよ。

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

³主はお前の罪をことごとく赦し

病をすべて癒し

⁴命を墓から贖い出してくださる。

慈しみと憐れみの冠を授け

⁵長らえる限り良いものに満ち足りさせ

驚のような若さを新たにしてください。

⁶主はすべて虐げられている人のために

恵みの御業と裁きを行われる。

⁷主は御自分の道をモーセに

御業をイスラエルの子らに示された。

⁸主は憐れみ深く、恵みに富み

忍耐強く、慈しみは大きい。

⁹永久に責めることはなく

とこしえに怒り続けられることはない。

¹⁰主はわたしたちを罪に感じてあしらわれることなく

わたしたちの悪に従って報いられることもない。

¹¹天が地を超えて高いように

慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。

¹²東が西から遠い程

わたしたちの背きの罪を遠ざけてください。

13 父がその子を憐れむよつこ」

主は主を畏れる人を憐れんでくださる。」(詩篇102・2〜13)

まず、永遠の生命をくださるという。命を墓から贖い出し、長らえる限り良きものを与えてくださる。そういうことを約束し、憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。罪の嵩かさに從つて報われたいという。はるかに恵み深いということを言っています。

「天が地を超えて高いように慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。父がその子を憐れむように主は主を畏れる人を憐れんでくださる」

という。ここは旧約における福音といわれる箇所なんです。旧約聖書というのは、日本人は嫌う。ユダヤ民族に与えられたもので、血なまぐさい歴史に貫かれているとあって、嫌がるんです。血なまぐさいと言ったら、日本の歴史だって血なまぐさいでしょうが。

幸いなるかな

まだプリントのほんの入口しか話していないんですけれども、一かけらでも味わっていただけなら、それでいいんです。今度は、新約聖書からの引用のところへ移ります。

聖書のマタイ福音書5章1節から12節、見出しに「幸いなるかな」とありますが、この題名は全部、私が付けたものです。たとえば、先程の詩篇103篇も「人の思いを超えた神の慈しみ」という題を付

けました。そんなふうにそれぞれ私が題名を付けました。

この5章のところは、いわゆる「山上の垂訓」とか言われている。「垂訓」というと教えを垂れるということですが、非常にいかめしい感じですが、この新共同訳では「山上の説教」となっています。これもまだ抹香臭いですね。

私が導きを受けた小池辰雄という先生は、「山上の大告白」と言われた。

「教えではない。キリストは自分の内面を告白しているだけだ。キリストはそんな教えた
りする人ではない。もつと自然人だ」

と。本当にそうだと思いますね。それは弟子どもに対して教えられた部分もあるでしょうけれども、大体は自分の見てきたことや、自分が今どういう思いかを告白されている。なにせ、天からくだってきた人ですよ。

「天の次元はこうなんだよ。地上では憎み合ったりしているが、天上の世界ではそうではないんだよ」

と。では、どうしたら、天上の世界に我々は地上で生きられるのかと。それにはひとつの鍵がある。それは何か。

「それは隠されている。私を受けとりなさい。私がお前と一つになったら、あなたは私の
言っていることがみんなわかる。みんなできるようになる」

と。これが天国なんです、本当は。天国というのは、なにか「青い鳥」みたいに、あっちこつちに

探しに行くのではなくて、そこにあつたという。青い鳥はそばにいたんでしょ。天国はあなたの心の中に宿る、キリストというお方があなたの中に宿れば。でも、肉体の人間は宿れません。だから、天界に行かれたキリストは今度は、聖霊という姿で私たちの中に宿ってください。それが歴史的に起こったのがペンテコステといわれている聖霊降臨です。

イエスは復活後四十日間、弟子たちと一緒にいられて、天に昇られるとき、

「祈っていないさい。そうしたら、私は降くだってくるから」

と言われた。そして、聖霊降臨という事態がありました。それからです。もう本当に弟子たちは霊なるイエスというお方と一つになって伝道が始まった。これが昔の「使徒行伝」、今では「使徒言行録」の事態なんです。

キリストが地上でいろんなことを仰っていますけれども、それが本当に受けとれるには、自分たちの中味が変わり、変質しないとイケない。「肉」と「霊」といいますが、肉なる姿というのは生まれながらの姿なんです。我々の生まれながらの姿は肉なる姿といえます。これは別名は、「自己中心」です。

イエスという方は肉体をとってこられたけれども、その中であつていつも、「かぐや姫」みたいに天を仰いで、父なる神さまを、

「お父ちゃん、お父ちゃん」

と呼んでいたわけですよ。とにかく、イエスは地上におりながら天を慕あこがっておられた。自分の故里

ですから。そして、故里へやがて帰って行かれる。でも、帰り方が気の毒なんです、さつきから言いましたように、十字架なんです。かぐや姫はスーッと行きましたよ。

「月から来たので月に帰らなければなりません。お爺さん、お婆さん、さよなら」

と言って、天に昇っていく。いろんなやつがみんな守ったけれども、光がきて、目が眩くらんで、かぐや姫は天に昇って行ったという、あの「竹取物語」は実にうるわしい物語ですけども、キリストはそうじゃない。十字架というものがありません。

キリストの十字架

「なんでやねん、この十字架は!？」

と。それがさっきのイザヤ書53章に出てました。人間の背き、自我を——煮ても焼いても食えない自我——それを全部、引き受けた。それは重いですよ。何十億人の罪を全部背負いきるんですから。過去・現在・未来、全部なんです。こんなことは神の子にしかできない。どんなに偉い宗教家であつてもこれではできない。

お釈迦さんは幸せな人です。涅槃ねはんの境地に入つて、

「さあ、みんな寄つておいで。小鳥もみんな寄つておいで。みんな幸せな世界へ行こう」

と。あれで全部が救われるなら、本当にこれは「めでたしめでたし」ですけども、ユダヤのイスラエルに示された道はそうじゃなかった。十字架の道ですから。どっちが好きかと言われたら、多

分皆さんは、お釈迦さんが好きだと仰るでしょう。でも、好き嫌いで決まらないですね、本当のところ。好き嫌いではどうにもならん。

やっぱり、人間というのは自我という、神に反逆するところがある。アダムとイブの昔からずっと積み重なってきた、遺伝で積み重なってきた。これはそんな簡単に消えないですよ。御祓おはらいをしたくらいで消えたら楽ですけれども、そんなもので消えない。それを神さまはイエスという愛いと子を選んで、

「お前がそれを片づけろ」

「どないしてやりまんねん？」

「十字架だよ。これしかない」

「わかりました！」

というのがゲッセマネの祈りです——こんな落語みたいに私はしゃべっていますけれども(笑)——キリストの姿というのは本当に悲惨ですよ。

なにせ、今まで離れたことはなかったんです。皆さんは、神さまから離れて一か月やそこらは平気でしょ、多分。私たちは一か月くらいいたら、

「何となくおかしいな、なんとなく空虚だな。あつそうだ、忘れてた！」

と言って、また帰ってくるんです。人間というのはそのくらい、いい加減なんですけれども、この方は違います。いつも、「父よ、父よ」と呼んでいる。とにかく、神さまの懐で夜通しでも祈ってい

るのが楽しくてしょうがない。僕らからしたら難行苦行ですよ、「夜通しで祈っておれ」なんて言われたら。僕はやったことはありません。やった方を尊敬します。でも、僕はイエスという方が大好きだから、無条件に私を受け入れてくださるから、甘えているんですけれども。その代わり、私は自己主張はしませんよ。いつも、

「すべてはあなたから流れてきます。いいものは全部あなたから来ます。それを無条件にいただきます」

と言っているから、

「まあ、よっしゃ。それでいいわ」

と、きつと言ってくださいっているとと思うんです。この方は、すべては父一切で歩んだ。そうですよ、

「私は何ものでもない」

と言っていた人でしょ。

「私を見た者は父を見た」

というのがそのままですよ。空っぽだから、神さまが充滿している。ところが、弟子たちは見えなかった。

「父を示し給え。さらば足れり」

なんて言う。お別れに臨んで、「何か望みはないか？」と言ったら、ピリポが、
「別れるのはいやだけれども、せめて最後に、父を示してください。そうしたら納得します」

「こんなに長いこと一緒に居たのにまだわからないの!」
 と。「この馬鹿もの!」とは仰らなかつた。僕だつたら、「まだわからないの。このバカツたれ!」
 言いそうだけれども(笑)。キリストはそうではなくて、

「私を見た者は父を見たんだよ」

と言われた。ヨハネ伝に出てくるでしょ。桁違いなんですね。とにかく、天の御座みくらを捨てて、地上に姿を取ってくれた。

サンダーシング

インドにサンダーシングという方がいた。彼の『インド 永遠の書』という本がある。生まれたのは1889年。1904年12月18日に彼は回心して、大転換する。本当にキリストが現れてきてくれた。彼は小さい頃から宗教教育を受けて、自分のお母さんの宗教を受け継ぐ者として定められていた。ところが、空しくなつて、宣教師たちに逆らつて、宣教師の目の前で聖書を引き破つて焼いてしまった。さすがに気が咎とがめて、それで3日ほどたったときに、何をしても自分の心に平安がない。英才教育を受けてきたけれどもだめ。

「神さま、本当にあなたがいらつしやるなら、教えてほしい。それを教えていただかなければ、私は自分で自分の命を断ちます」

と決心して、午前3時から水を浴びて祈りだした。4時半になつても全然、答えが来ない。ところが、その直後に部屋の中がバーツと明るくなつて、そこに光のようなものが射ってきて、キリストの御姿が現れたという。彼はキリストを知りません。聖書を破っているくらいですから。ところが、キリストが現れてきた。彼は、仏陀とかクリシュナとか何かそういう霊なる存在が現れてくれると思つていたら、現れたのはキリストだった。それで、彼は一晩で生まれ変わるんです。それから迫害されます。毒を盛られて死にかかる。それから伝道に出かけます。この本にはそのサンダーシングの生涯のことがちよつと始めに書かれていて、それからあとは——サンダーシングはしばしば岩の上に座禅を組んで祈る。4、5時間も祈ると、天界が開かれてキリストが現れて問答する——そんな記録がこの『インド 永遠の書』という本です。そういう人なんです。

とにかく、我々には天界のことはわからない。そのわからない天界のことをわかる姿で何とか伝えようとして、イエスという方が現れてくれたけれども、人間の思いと神の思いとはあまりにもかけ離れています。だから、水と油でした。水と油はあい容れない。あんな善きことばかりをなさつたキリスト。そうでしょ。福音書の中でこんなに慈しみ深い、恵み深いお方はいらつしやらない。宗教的な人間の間違いは正されましたよ。特にパリサイ人とか、そういう当時の宗教に対しては厳しく「間違っている」と言われた。それで憎まれて、十字架でしょ。でも、苦しんでいる人とか、病に悩んでいる人とか、それから、宗教家からさげすまれてくる者とか、そういう者に対して本当に慈しみ深いですよ。だから、そういう人は寄ってくるわけでしょ。そういうキリストでした。

山上の大告白

マタイ伝は非常にキリストの言葉がたくさん集められている。これは「キリスト語録」というキリストの言葉ばかりを集めた資料があつたそうで、それがマタイ伝ではふんだんに展開されている。ルカ福音書の方は、キリストの伝道の順序に従つて、マタイ伝で一括に集まっているものを、ところどころをその時々に合わせて編集し直されています。それがルカ福音書です。マタイ伝はマタイ伝のひとつの意図をもってそういうふうなイエス語録を集めた。それからイエスのなさったことがずつと出てくる。それぞれ聖書を編纂した方の意図というものがありません。

マルコ伝は一番素朴なんです。とにかく、ペテロが自分の弟子のマルコ・ヨハネに口述筆記させたというふう言われている。だから、マルコ伝は一番単純です。その前に置かれているのがマタイでしょ。それからルカ。このルカというのは非常に異邦人向けに書かれていますから、他の福音書にないものがふんだんに使われています。「放蕩息子の譬話」とか、「善きサマリヤ人の譬話」とか、他の福音書に見られないような特色を持っているのがルカ福音書です。非常に人間性豊かということが言えると思う。

それから、一段とまた次元の高いというか、深いというか、それがヨハネです。これも歴史的な順序で書いてない。ドラマチックに天の世界を、天の次元をヨハネを通して語っている。ヨハネ伝では、「その次の日」と書いてあつても、起点がわかりませんから、「昔、昔ある所に」というのと同じように、「その翌日」といつても、いつを起点に言っているのかがわからない。ヨハネ伝はそんな書き方です。でも、非常に深い。

有名なのはこの「山上の垂訓」と言われたマタイ福音書のこの箇所です。これを小池辰雄という私の先生は、「山上の大告白」と言われた。つまり、キリストはご自分の内面をここで告白しているだけで、説教がましいことを言うようなお方ではないと言いました。自分の内側をオープンにして、「紹介するならば、この通りだよ」

という。ところが、次元があまりにも高いから、みなついて行けなかった。内容がこの世の価値観と全く逆なんです。『心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。』(マタイ5:3)と。「貧しい」というのは、さみしいのではない。心が、霊が——これは心ではなくて霊です——霊が神さまの前に空っぽ、オープンマインド。これはキリストの姿です。神さまの前に空っぽでしょ。だから、神さまが充滿したでしょ。自分の告白なんです。

「私は神さまの前に空っぽだ。そうしたら、天国が私の中に充滿している。こんな素晴らしいことはいや」

と、それだけなんですよね。

でも、人間は貧しくなれない。みんな己をサムシング(何ものか)だと思つています。だから、人に軽蔑されたり侮辱されたら、怒りますよね。まあ金を盗られても怒るけれども、侮辱されたらもつと怒る。「プライドを傷つけたな!」とか。私の子どもの頃は、不良から「面切つたな!」なんて

言われた。ちらつと見たら、「おい、面を切ったな！」と言われて、逃げ出すわけです(笑)。つまり、おのれのプライド、名誉毀損、いろいろあります。それはそれでいいんですよ。

けれども、このお方は神さまの前に空っぽなんです。というのは、神さまほど素晴らしい方はないと信じているからです。あるいは、昔、神さまと一緒に暮らしていたのが、故あって地上に現れてきたんですよ。マリアさんのお腹に宿って現れて来た。でもやっぱり、天国は恋しいし、本質的には向こうから来たお方だから、神さまの質が浸透しています。それと人間的な要素、この二つがからんでいます。これがイエスですよ。もし単に天国的要素だけだったら、我々とは断絶があります。悲しみがわからない。みんな、

「何で? 不思議だね」

と、これで終りなんです。ところが、マリアさんから生まれて、人としての悲しみも痛みも、センシビリティ(sensibility:感受性)が人一倍深い。だから、人一倍深いその本当のセンシビリティと、それから神さまのものを100%に受ける。向こうから流れてくる。この二つが一つになっているお方がイエスというお方です。そういう角度で福音書を読まない、それは読めないですよ。

私はナツシングだ

そして、皆さんはすぐ奇蹟に躓くんです。神さまのところからやって来て、神さまの霊が充満している方がいろんなことをなさる。これは全然、不思議ではない。しかも、「やった、やった」と言

って何も誇っていない。イエスという方は、

「自分は何もできない。父が私の中で御業みわざを行っている。私の言葉は、父が語れと言われていることをそのまま取り次いでいる。それだけのことだ。自分は空っぽだ」

と言っている。いろんな宗教家はそんなことは言わない。「私は真理を体得した。さあ聞け」なんてな調子で言うかも知れませんが、この方は、

「私はナツシングだ」

と。それが「霊が貧しい」姿です。神さまの前に己を立てない。神さまの前に完全に明渡して、オープンマインドだ。そうしたら、神さまが100%に宿る。だから、

「私を見た者は父を見た。見えない神さまを、私を通して見てごらん、霊の目で見てごらん。身長何センチ、体重何キロなんて、そんなんじゃない。肉体の私の背後にいる霊なるお方、これを見てね」

と言う。それが地上の人間には見えなかった。自分の尺度で判断するから。今だつてそうですよ。福音書にいろんな奇蹟の業が書かれているのを、大抵、神学者は全部、否定する。

「そんなバカなことはない。あんな非科学的な、非合理的なことはない」
でも、神さまの側から見たら、

「何でそんなことを問題にするのか。それは本質的にはどっちでもいいじゃないか。そう。いったことを通して何が語られているか、これを受けとってほしい。これを知って欲しい」

と。「徴^{しるし}」というのはそういうことなんです。「パンの徴」とか言いますね。

「五つのパンを五千人の人が食べても、なお十二の籠^{かご}に満ちあふれた」とか、「七つの籠にあふれた」とか書かれています。それは永遠の生命——あのパンではなくて——

キリスト・イエスという方は永遠の生命です。

「私は生命のパンである。私を食べる者は死なない。永遠の生命にあずかる」

と言われた。それを知ってちょうだいねと。ところが、人々はこの人を捕まえておいたら、パン問題は解決すると思った。彼を捕まえて王様にしようとした。それで、イエスは逃げて行かれたと。

「神さまが与えようと思っている永遠の生命、愛の生命を、憎しみから解放された世界、太陽のごとき光輝き愛に満ちたその世界を受けとってほしい」

と言って来られたのに、人々は「ああ、パン問題はこれで解決する」というので王様にしようとした。だから、イエスは逃げて行かれたと書いてある。

お前は十字架にかかって人の罪を背負え

一事が万事、そのぐらい神の思いと人の思いは、天と地が隔^{へだ}たるくらい、東と西が遠いほどに隔たっている。それに気づけばいいんです。気づけばいい。

「ああ、そうだったの。それでは、もう地の、肉の思いを——生まれながらの人間の思いを肉という——これを捨て去って、ひたすらあなたに向かいます」

という、「悔い改め」というのがそれなんです。方向転換です。翻^{ひるがえ}るということ。自分を責めたつてしようがないですよ。そうではなくて、

「私は今まで背を向けていましたけれども、あなたに向かいます。そうしたら、光が射し込んできます。今まで閉ざしていたものが、いつのまにか開かれています」

と。すると、イエスは、

「そうだよ。十字架で全部、開いたよ。お前さんの自我という、プライドとか、いろんなものがあつた。それが邪魔して神さまの愛が届かなかつた。けれども、全部、十字架で引き受けた。全部、十字架で背負ったから。ああ、重かつたよ」

と。それは重いと思いますよ。過去の全人類の罪、自我、それから未来にまだまだ続いていくでしょ。それも全部、過去・現在・未来、全部の人間の罪、我を——自我です、神に逆らう思いです。これが「罪」なんです。神に逆らう思い、己を主張するのが「罪」なんです——それを十字架で引き受けた。これは重いですよ。しかも、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

と言われた。さっきのイザヤ書のとこに、

「彼は人に侮^{あは}れられ、捨てられた」

とあつた。人に捨てられるのはまだいいですよ。でも、神さまに捨てられるというのは、これはひどいではありませんか。あんなにいつも一つで、愛され、愛し、本当に一つであつた、このイエス

という方が引き裂かれて、蹴飛ばされて、地獄のどん底まで落とされた。これが十字架なんですよ。皆さん、「十字架、十字架」と言いますけれども、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたましい」というのはその叫びなんです。

「こんなにあなたと一つだったのに、お捨てになるんですね、本当に」

という、イエスにとって未だかつて味わったこともなかった体験です。それをあらかじめ示されたのがゲッセマネの祈りなんです。ゲッセマネで弟子たちは寝てたでしょ。祈りは耳に聞こえていたけれども、寝てたんです。天使が現れて励ましたという。

「額から落ちる汗は血の滴の如くであった」

と、ルカ伝に出てきます。今まで一つであった方が引き裂かれようとする。しかも、「何のためですか」と言うと、「お前のせいではないんだよ、気の毒だけれども」とは一言も仰らない。

「とにかく、お前は十字架にかかって人の罪を背負え」

と言う。それが十字架ですからね。これはお釈迦さん知らない世界です。どの宗教家も知らない世界です。イエスというお方だけが味われた道です。

だから、私は申し上げたい。いろんな宗教の隔たりに拘らなくてください。それぞれの宗教にはそれぞれの意味があったでしょう。それはそれで結構です。でも、ちょうど太陽が一つであって、一つの太陽によって地球は生かされているように、究極のところからくる生命の光、生命の源、そ

こから流れてくる生命を受けてみんな生きる。それぞれの宗教はそれなりの役割がある。氏神様には氏神様の役割があります。鎮守ちんじゅの森でその地域を守る。お地蔵さんはお地蔵さんでその役割があるんですよ。

でも、それらのいろんな役割を突き抜けて、本当の霊なる人間は、人は肉体的な人間であると同時に霊なるものです。「ひと」というのは「霊止とと」、霊が止まると書く。『大言海』という辞典をご覧ください。なるとうわかります。

「神の霊が止まっている存在を霊止ととという」

と、大言海に書いてあります。そういう、神さまの霊を受けていた、それに満たされていた方が、天と地の間に引き裂かれる姿で十字架にかかって、

「父よ、彼らを赦したまえ。そのしていることがわからないからです」

と、そう言って執り成したんですね、十字架の上で。そして最後は、

「私の霊を御手に委ねます」

と言って、息を引きとられた。

「神殿の幕が真つ二つに裂けた」

と書いてあります。というのは、今まで旧約の世界で閉ざされていた天が開かれたということでしょう、象徴的に。そのお方が、こうやって、

「霊の貧しいひとは幸いだ。神さまの前に自己主張をしない、あなた(神さま)だけですと

言っているその姿が一番素晴らしいんだよ」ということを言っておられるわけです。

幸いだ、私があなを慰めるから

「悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。」

これは第三人称で書いてましょ。淡々と客観的に、こういう人はそうだと。次に自分をあてはめて、「私はそうなのか、そうならいいな」と。裁判というのはそうなんです。三段論法というのがありましたよね。大前提、小前提とか何とかと言うんですけれども。聖書の言葉を読むときには、それはだめなんです。

キリストが私に語りかけているという、そういう読み方をしてください。たとえば、「悲しんでいる人は」とあつたら、

「あなたは悲しんでいるね、悲しいね。人から見たら悲しいだろう。しかし、本当はそう

じゃない。幸いなんだよ。私があなを慰めるから。私とあなたは一つなんだからね」

という、すべて、「私(キリスト)」が」というのが背後にあつて、そして、

「お前を、あなたを抱きしめるからね。あなたと私は一つなんだ。そのために来たんだよ」

と。これが福音なんです。これを受けとれる人は幸いです。

ところが、傲慢な人とか、驕り高ぶっている人とか、満ち足りている人とか、権力の座にある人

賢^かすぎる人、これはそれを受けつけないんです、残念ながら。あまりにも健康に恵まれている人とか、あまりにも幸せな人、これは受けつけない。ところが、ズタズタにボコボコにされた人はそういうものにすがりつきたい。だから結局、その人たちは幸いなんです、本ものに出会うことができたから。星野富弘さんという方は、中学校の体育の教師で、鉄棒の指導をなさっていて、自分が鉄棒から落ちて、首から下がだめになつたでしょ。何度も死のうと思われた。ところが、導かれて、キリストを知って、それから口に絵筆をくわえて絵を描くようになった。そして、素晴らしい絵を次から次へと描いているでしょ。世界中にあの絵が送られているそうですね。もしもあの人^が首から下がだめにならなかつたら、中学の体育の先生で終っていたかもしれない。ところが、自殺をしたと思うほどのどん底に突き落とされて、天界が開けて、そして、天の輝きをもって絵を描いているから、人の心を打つんです。しかも、あの人は悲しみのどん底を味わっているからです。ですから、本当にキリストの言葉というのは、この世的に見捨てられた人とか、この世的にボコボコにやられてしまった人、自己嫌悪に陥った人、裏切られた人、とにかくマイナス要因をかかえている人たちのところにやって来るんですね。そして、

「私があなを慰める。私があなを本当に生かす。マイナスと見えたものは実はプラスへの転換点だったんだよ」

と。十字架という最も無惨な死が生命への道なんです。

キリストがあのまま死にっぱなしならば、もう私も存在してないし、もう真っ暗です。でも、あ

の方は永遠の生命の姿で現れてきてくれたでしょ。そして、いろんな人に今も現れてきてくれるんですね、サンダーシングにも現れてきたし。

鍵は一つ

そういうことで、もう時間がきてしまったけれども——これは目茶苦茶です(笑)——たくさん資料を用意したのに、百分の一もしやべってない。

でも、鍵は一つです。本当に自分から解放された人、この世のことだけで生きてきたのではなくて、霊界が、天界が開けて、神さまの光が射し込んでくる人。その光はキリストの光です。キリストは今も生きておられますから。本当に求める者に姿を現してくださいますから。その人に出会ってほしいんです。

私はそれで生きてこれたんですね。24歳ではまだまだわからなかった。歳を重ねることに深まってきました。はい、本当の本当だと思ってしまうようになりました。なんとかして、この世界を知ってほしい。それが私の心からの願いなんです。

ここに来ていらっしやる方の多くの方々とは、私は個人的にも繋がりがありません。やっぱり、個人的つながりというのは大事なんですね。こういった真理の世界というのは、宣伝だけではだめなんです。周知だけではだめです。やっぱり、人から人へ、心から心へ、魂から魂へと、それを通して伝わっていくということがよくわかります。

だから、皆さんが本ものを味わわれたら、今度は皆さんが神さまに用いられる番ですから。自分の中にしまいこんではだめです。オープンにしてたくさんの方に分かち与えていく。これで神の国は広がっていくんです。

私は何の組織にも属しません。本当に一匹狼みたいな存在です。小池辰雄という素晴らしいお方に会ったおかげで、そういう道を歩んだんですけれども、でも、その私の導かれた道はまことに御意みごころにかなう道だったと思っています。この世的にも用いていただきました。いろんなポストにもつけていただきました。

でも、私を導いてきてくれたのはキリストなんです。私はキリストによって生まれ変わったんです、24歳で。それからもう今は77歳になっていますから、たいへんな年月ですね。段々、キリストの素晴らしさがよけいわかってきた。だから、なんとかしてこのお方を知っていただきたい。そのために私が裁判所に勤めるなら、役に立つなら勤めなさい。どこどこに居るのが役立つのなら、そこに行きなさいと。派遣社員ですわ、私は(笑)。いろんな所へ行く。皆さんと一緒に皇居の回りを走ってみたりとか、いろんなことをやりますけれども、それは私のうちにあるこれを知ってほしいから。

「あの人は何であんなに元気なんだろう。なんで、あんなにいつもニコニコしているんだろう？」

と。それはキリストというお方が私の中に宿ってしまったからです。キリストは、

「私を見た者は父を見た」

と言われたけれども、私も、

「本当に私の本当のところを見たら、人は私の中にいらっしやるキリストにきつと出会っていらっしやるはずですよ」

と、そう言いたい。生まの人間奥田からはそれは出てこないんです。

私はふさぎ込んでいて、いつも自分を責めていた。本当なんですよ。ところが、このキリストの光が射し込んできてからはもう変わりました。24歳で変わった。それから歩いてきました。光に導かれて、いろんなところに頭をぶつけながら、疑ったり、悩んだり、いろんなことをしながら。でも、本当の光の道でした。だから、その光の道に皆さんも来ていただきたいという、その思いをこめて、日曜日は日曜日です。一年に一回こういうところでこんなお話をしているんです。自分で味わってください

ここに作りました資料はほんの一部ですけれども——始めの頁に見出しが付いていますが、この角度から——これを皆さん、ご自分で味わってください。これはそれぞれが素晴らしいんですよ。一貫して流れているものは、

「己を高くするものはだめだ、己を主張するものはだめだ」ということ。

「一番偉いものは誰か。人に仕えるものが一番偉いよ」

「ということキリストは言われたですね。」

「神への愛と人への愛は一つだよ」

「ということも言われています。」

「愛する者の中に神は宿る」

「ということも言われています。」

「人は神の神殿だよ」

「ということも書かれている。」

「聖霊というお方によって初めて人間は新しく生まれ変わる」

と。ウワツ、すべてが素晴らしいんですよ。もう、時間がなくて残念！ また今度、徹夜でも皆さんとお話しする機会を与えてください。もう時間がきたので、これで終らざるをえません。

祈り

では、このあとお祈りします。お祈りというのは神さまへの語りかけです。感謝のお礼なんです。主イエス・キリストさま。もう、時間がきてしまいました。けれども、ここにお集いになった皆さんお一人おひとり、実はあなたが招いてここに引き寄せてくださったのだと、私は信じております。

どうぞ、私で語り足りなかったことをこの今日の資料を通して、またご自分でじかに聖書をお開

きになって、

「ああ、あなたはこんなに恵みふかく、憐れみ深く、根底から私を愛してくださったのだ、生まれでる前から私のことを大事に思ってくださったのだ」

と、そのことに、どうぞ、気づいて、

「目が開けました。新しく生まれ変わりました」

と、そういう喜びをもつてこれからの日々を過ごしてくださるように。

また、ここに集われた方の多くの方々はこの世にあつて大事な仕事に携わっている方々です。その方々に賜った才能を、世のため人のために、またあなたのお喜びになるようにと用いていただいて、本当に一人ひとりを通して神の国がこの地に成っていきますように。

また今、痛んでいる方、悲しんでいる方、病んでいる方、その中にも、その人のところにも、あなたがじかじかに馳せ参じてくださって、励ましを与え、命づけ、そしてあなたの喜びの中へと、愛の中へと導いてください。

今日ここに集いたくても来れなかつた方がたくさんいらつしやると思います。どうぞ、その方々にも、いかにしても今日おいでの方々がお伝えし、またあなたがじかじかにお与えくださいますように希い奉ります。

この会のために労してくださった東京キリスト召団新宿集會の方々のために心から感謝を申し上げます。このつくしませぬ祈り、感謝を主イエス・キリストの尊い御名をとおして御前にお献げい

たします。アーメン。

〔小冊子『神の思い』と『人の思い』——真に豊かな人生への道——(2010年8月18日発行)〕